令和４年度 アメリカ研修 個人報告書

21A135 山下侑里乃

私は、令和５年２月21日から３月５日までの13日間、アメリカでの薬学研修に参加した。この研修では Western University of Health Sciences(ウエスタン大学)での講義を基盤に、病院や薬局の見学といった実地調査やワクチン接種の体験が行われ、アメリカの薬学教育およびアメリカでの薬剤師の役割について座学のみならず自分自身の体験から学びを深めることができた。

この個人報告では、研修を通して学んだことのうち「薬学教育」について取り上げようと思う。

●アメリカの薬学教育について

薬剤師を目指す場合、日本では高校卒業後に6年制の薬学部に入学し、国家試験の受験資格を得る、というのが一般的である。それに対しアメリカでは、高校卒業後すぐに薬学部で学ぶのではなく、pre-requisites または undergraduate といった形で、生物や化学、微生物学、英語といったいわゆる基礎となる教養科目を学んだ後に PharmD と呼ばれる日本でいう"薬学部"で学習をする、というのが一般的であるそうだ。pre-requisites や undergraduate は2～4年、その後の PharmD は3～4年のカリキュラムであるため、アメリカで薬剤師の資格を得るには日本より長い7～8年間の学習が必要となる。卒業後もすぐに働くだけでなく、レジデンシ―というものに参加して臨床的な経験を積んでから薬剤師になったり、フェローシップで研究に専念したりといった選択肢があり、そこでさらに1～3年学ぶという学生もいるのだそうだ。日本よりも長い分、より多くのことを学んでいるということが講義を通して強く感じられた。

●レジデンシ―とは

上に記した"レジデンシ―"というのは、PharmD の課程を終えたのち、薬剤師としてではなく"研修医"に近いポジションで病院や薬局で臨床的な経験を積むことができるものである。PGY-1と2があり、PGY-1では一般的な、PGY-2ではより専門的な部門で学ぶことができる。PGY-2では小児、感染症、救命救急、がんなどといった専門分野に特化した臨床経験を積むことで資格を得ることもでき、より高度な技術をもとに職の幅が広がるのがメリットのひとつであるそうだ。

見学に行った病院でもレジデンシ―に参加している学生がおり、周囲の薬剤師と同じように現場で活躍している様子が伺えた。

●大学での講義について

研修期間中、私たちはウエスタン大学の講師の方々から様々な分野の講義を受けた。講義のスタイルは座学だけでなく、ワクチンの接種デモやフィジカルアセスメント体験などといった実践的な内容も多く取り入れられており、非常に有意義な時間であった。

写真1. フィジカルアセスメントの様子

フィジカルアセスメントのレクチャーでは、日本では医師が行うような心音や呼吸音の聴診や触診、打診などの方法をクラスメイトや人形で体験した。

写真2. ワクチン接種デモの様子

アメリカでは研修を受けた薬剤師及び薬学生によるワクチンの接種が認められている。講義では、実際にウエスタン大学の学生によるワクチン接種の様子を見せていただき、その後自分たちもレクチャーを受けながらオレンジにワクチン接種のデモを行った。

大学の付属薬局の見学では、糖尿病のケアに携わる専門薬剤師の方から、日本ではまだ使われていない最新の糖尿病の薬や血糖値のモニタリングを行う器具について、実物を用いて教えていただいた。

写真3. 講義の様子

また、講義内ではグループワークを行う機会が多くあり、学生同士だけでなく講師の方と意見を交流しながら学ぶことができる能動的な講義のスタイルは、学びが深まる場面に多く出会うことができ、魅力的であると感じた。

●感想

ウエスタン大学での研修を通じ、日本では学ぶことのできないことを数多く学ぶことが出来た。薬学教育やアメリカの医療制度についてはもちろん、アメリカの人々の暮らし方や考え方なども知ることが出来、自分の考えがさらに広く深くなった。

またアメリカにおける薬剤師は、日本と比べてより広い分野で活躍し、医師や看護師とより対等に働くことができる、重要な役割として存在していると感じた。また、日本に比べて学生が学びに積極的であるのが魅力的であった。

この研修を通して気が付いた日本とアメリカそれぞれの薬学、医療の利点を吸収し、この知識を将来薬剤師になった際にも生かしたいと考えます。最後にはなりますが、今回はこのような素晴らしい研修に参加させていただき、ありがとうございました。